



問合先: 岩手大学教育学部 〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18番33号 TEL.019-621-6504 FAX.019-621-6600
E-mail edu jim@iwate-u.ac.jp URL https://www.edu.iwate-u.ac.jp/master/

この冊子はグリーン購入法に基づき基本方針の判断基準を満たす用紙を使用しています。



「教育実践研究の成果」を更新して公開中
教職大学院ホームページにてご覧いただけます!

<https://www.edu.iwate-u.ac.jp/master/>

岩手大学大学院教育学研究科研究年報
オンラインISSN 2432-924X

第4巻 (特集論文4編、論文17編、計21編を収録)

岩手の教育課題に関する論文の特集を常設しました!

- 山本奨・佐藤和生・有谷保・板井直之・川原恵理子・三浦健・若松優子(2020) 援助要請の仕方とその受け止め方に関する心理教育プログラムの提案
- 木村洋・鈴木久米男・小岩和彦・藤岡宏章(2020) 中学校における働き方改革-教員の意識改革および業務改善に関わる実践を通して-
- 村上貴史・清水将(2020) ネット型連携タイプにおける教師が身に付けさせたい力の明確化~小学校高学年ボール運動領域を対象として~ 他18編

「学校マネジメント力開発実習」での学びと手応え

教職大学院では、スクールリーダーと即戦力の新人教員の養成を目指し学修が進められています。現職院生は、教育行政の場における実習に取り組みます。



M1 佐々木良一

[現職院生 実習校:盛岡市立下橋中学校]

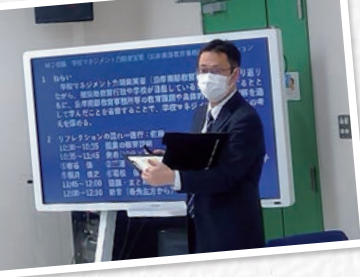
岩手県の教育行政、教員研修システム、学校組織マネジメントの考え方等、5日間にわたり実習を行いました。県教育委員会では本県が抱える学力向上に係わる課題や進行中であるGIGAスクール構想について認識を深めました。県教育センターでは教員研修の実践について学びました。この知見を今後の実践に生かしていきたいと考えます。

M2 板井直之

[現職院生 実習校:盛岡市立桜城小学校]

教育行政での体験的な実習を通して、その仕組みや役割、施策の推進や具体の取組を体系的に理解することができました。子どもを中心に据えること、目的やねらい・思いや意識を共有すること、PDCAサイクルを確立し、教育の質の向上を図ることの重要性を強く感じました。「よりよい学校づくり、人づくり」に貢献していきたいです。

「子ども支援力開発実習」での学びと手応え



教職大学院では、子どもたちの生活上・発達上の諸課題を的確に把握し適切な支援ができる専門的力を高めるべく、心理教育や児童生徒の観察等に取り組めます。

M2 巨理大也

[学卒院生 実習校:岩手県立盛岡第一高等学校]

大学院生として最後の専門実習では、数学と心理教育の授業実践をしてきました。生徒とのやり取りを意識的に行い、学習内容をどんな形で生徒に伝えるかを工夫しました。実践を通してこれまでの学びを活かした所、そうでない所が明らかになりました。今後は自身の課題と向き合い、実践内容を整理・分析する時間にしたいです。

M2 佐藤和生

[現職院生 実習校:盛岡市立城南小学校]

今回の担任へのコンサルテーション体験をおとして、児童や担任の教育的ニーズを共通理解する大切さ、一面的でなく多面的に情報を収集し考察する大切さ、一方的ではなく担任と一緒に協働の意識で援助方針を考える大切さなどを学ぶことができました。今回の貴重な経験を今後の教育実践に活かしていけるよう努力していきたいです。

融合。実践の理論と

後期から対面授業が再開しました。感染予防策を講じつつ、院生は学びをすすめています。



教職大学院の日々

M1 工藤 洸

[学卒院生 授業力開発プログラム]

教職大学院では様々な講義や演習を履修できますが、その中でも大きな魅力は、様々な経歴をもった頼れる教授陣や、現職の先生方と気兼ねなく情報交流や話し合いをすることができるとだと思います。一人では絶対できない学びや経験を毎日することができ、教職大学院に入学して良かったと思える日々を過ごしています。

M1 所 慎一郎

[現職院生 学校マネジメント力開発プログラム]

前期は、遠隔授業を想定した授業開発の講義・演習がありました。児童・生徒役となり、校種を超えてさまざまな授業を受けたり、授業内容の協議を重ねたりして、遠隔授業の可能性を模索しました。このようにICT等、今後の教育課題となる内容も学べます。この学びを現場に戻った際に還元していきたいです。

教育学研究科教員 メッセージ

実務家教員 菅野 弘



今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止という大きな課題を抱えたスタートとなりました。教職大学院でも、前期授業はオンラインで実施することとなり、Web会議システムをはじめとする様々なツールを用いた授業を展開してきました。さらに、政府がGIGAスクール構想の前倒しでの実施を発表したことから、大学はもちろん、小・中・高等学校においてもICT機器を効果的に活用した授業が求められてきます。しかしながら、ICT機器の活用はあくまで「手段」であり、「目的」はこれまでと変わらず子どもたちの能力を伸ばすこと。教育における「不易」と「流行」、そして、教育の目的や本質について、教育環境が目まぐるしく変化する今だからこそ、一度立ち止まって考える必要があるのではないかと感じています。